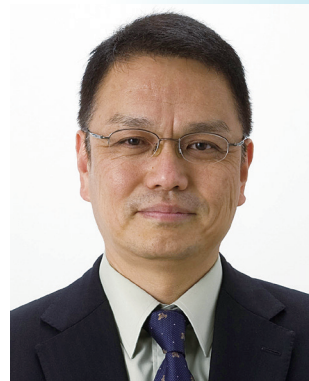


春風駘蕩

内山 知実

Tomomi Uchiyama

名古屋大学
未来材料・システム研究所 所長



我が家の庭の片隅に置いた植木鉢を眺めるのが近頃のささやかな楽しみになっている。昨夏、スーパーで購入し食べた後のレモンから5個の種を採り、ごく浅く水を張った小皿に置いた。その約1週間後にすべてが発芽し、双葉が開いたときのあの小さな感動は、理屈では説明しきれない喜びを伴うものであった。小皿から植木鉢に植え替えられた、まだ弱々しい双葉の茎が光を求めて伸びていく姿には、「未来」という言葉の手触りが確かに宿っているように思えた。

そんな素人ながらの園芸のなかで、忘れられない出来事がある。毎夏、枝がしなるほど多数の美味しいサクランボを付ける桜木が自宅の近所にある。ある初夏、その枝先10本を入手できたため植木鉢に挿したところ、2本が猛暑を越えて見事に根付き、翌春、一回り大きくなった挿木すなわち苗木が2輪の花を咲かせたのである。慎ましく可憐な花が開いた日、思わず声をあげてしまった。しかし、その夏、苗木に実は付かなかった。受粉を人が手助けしなければならないという基本を知らなかったのである。自然の営みには仕組みがあり、それを知らぬまま喜びに浸っていた自分を、どこか微笑ましく、同時に少し恥ずかしく思った。

だが、失敗は不思議な力を持つものである。次の季節に向けてどう工夫しようかと考え始めると、花一輪、葉一枚にさえ、以前より深い愛着が湧いてくるのである。小さな苗木に触れていると、その行く末を想像せずにはいられない。どんな枝ぶりになるのだろうか、将来たわわに実をつける季節が来るのだろうかなどと、小さな命の未来に期待を抱くこの感覚は、単なる趣味を超えて、どこか仕事に通じる気がする。

研究もまた、様々な試行錯誤の積み重ねである。一本の苗木が幾多の季節を経てゆっくり成長するように、研究も短時間で成果が出ないことのほうが多い。想い描いた仮説が崩れることもあれば、努力の末に辿り着いた方法が次のステップで壁に突き当たることもある。それでも私たちは考えることを止めない。失敗のなかには、次

の有望な芽が確実に隠れていることを知っているからである。

私が所属する名古屋大学 未来材料・システム研究所は、そうした様々な挑戦の連続の場である。装置を駆使し、得られるデータに目を凝らし、仲間たちと議論を重ねる日々。その一つひとつは極めて地味な作業ではある。しかし、そうした積み重ねの中にこそ、未来の人類に役立つ成果が静かに宿っている。苗木の背丈がある日ふいに伸びているのに気付くように、研究もまた、ある時間を契機に不連続的に飛躍することが多々ある。私たちはその瞬間を捕らえるために日々の手入れを欠かさず続けている。

一方、物質、運動量、熱が空間を移流する場合、それらは必然的に拡散していく。私の研究テーマのひとつに、ノズルから吹出すジェットの影響がある。最近、自動車の空力性能の向上をもたらす車体断面の形状技術（カムテール技術）からヒントを得て、ある形状の翼をノズル出口に設置したところ、ジェットの拡散が抑制されることを発見できた（特許第7722681号）。現在、エアコン吹出口などへの実装を目指して研究を進めているところである。

ふと、これまでの研究の時間を振り返るとき、あらゆる場面が苗木の成長に重なる。失敗を重ねた時、思いがけない成果が実ったとき……。周囲の仲間を支えられ、助言のひとつに救われ、ときに後輩や学生の着眼点の鋭さに驚かされながら歩む月日は、自分にとってもかけがえのない根となり、幹となり。今の自分が支えられていることに気づかされる。

庭の苗木たちは、今日も静かに空に向かって伸びている。この春、サクランボの枝がどんな花を咲かせるのか、今年は受粉をどう工夫しようかと考えると、自然と心が前へ向く。未来を想い描けることほど、人を強くするものはない。私たちもまた、日々の小さな挑戦を重ねながら、未来に向けて確かな芽を育てているのではないかと思う。